

パリ通信・第150号

カラヴァッジョ「エジプトへの逃避途上の休息」

3月は日本の学年末、学生には春休み、海外研修の時期だ。私がサポートしている語学学校や大学では2週間の海外語学研修旅行を実施している。ヨーロッパはイギリスが主流で、私はフランスとイタリアを希望する学生の現地滞在を手伝っている。コロナ禍以前は毎年10人を超える学生が集まり、日本から引率の先生が同行されていたが、コロナ禍、ウクライナ戦争、インフレ、円安ユーロ高の影響で2週間のヨーロッパ滞在は高額になり過ぎて厳しい状況だ。2週間は1週間に短縮せざるを得ず、引率の先生も同行せず、私が空港からホームステイ先の送迎、語学研修と課外活動サポートを担当している。

フランスはパリ、イタリアはミラノとローマ、2名の女子学生をローマの語学学校まで送迎した。語学学校はバロック芸術の巨匠ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ(1598-1680)の噴水があるナヴォーナ広場近くで、時間が許す限りでカラヴァッジョの作品を見ることが出来た。中でも感慨深かったのが「エジプトへの逃避途上の休息」である。



「エジプトへの逃避途上の休息」はドーリア・パンフィーリ美術館に所蔵されている。ヴェネツィア広場に近いこの美術館は名前の通りジェノヴァの旧家ドーリア家と法皇インノケンティウス10世(1644年法皇に選出)を出したローマのパンフィーリ家との婚姻による家系の住まいが今日の美術館になっている。1944年にはローマ市長を排出するなど、今日も続くローマの由緒ある家系だ。



カラヴァッジョの作品を4点所蔵していたが、1点「女占い師」(1594-1595)は1665年フランス王ルイ14世に寄贈され、今日のルーブル美術館にある。残る3点「エジプトへの逃避途上の休息」「悔悛するマグダラのマリア」「洗礼者聖ヨハネ」は、豪華絢爛な鏡の回廊に続く部屋に3点並べて展示されている。

「エジプトへの逃避途上の休息」がいつ誰の注文で描かれたかは明確ではないが、「悔悛するマグダラのマリア」と一緒に1595-1597年の間の制作されたと考えられている。135,7 x 166,5 cmのこの一枚はこれまでの宗教画とは全く異なる大胆で斬新な作品である。

「エジプトへの逃避途上の休息」は新約聖書「マタイによる福音書」にあるエピソードで、イエスの誕生を知ったヘロデ王が2歳以下の男子を殺害する「嬰兒虐殺」を命じる。ヨセフの夢に現れた天使がマリアと幼子イエスを連れてエジプトに逃れるよう告げる。パドヴァ(スクロヴェーニ礼拝堂)にあるジョット(1267頃-1337)の作品のようにイエスを抱くマリアがロバに乗って、ヨセフがその手綱を引く図が多い。



カラヴァッジョは背中から描いた天使を中央に大きく配し、左と右の対照的な構図を取っている。その天使はヨセフが持った楽譜(聖書の言葉を歌詞にして合唱するモテット)をヴァイオリンで弾いている。ヨセフの後ろには大きな澄んだ眼を見開いたロバがいる。ヨセフの脇に置かれた穀物の袋と水筒、地面に転がる石は地上の世界を表現している。それに対して画面右は美しい草花が咲き、清らかな水が流れ、マリアとイエスが穏やかに休息する天国の風景である。楽譜はアントワープの教会音楽作曲家ノエル・ボルドウィン(1480-1530)の合唱曲で夫と妻(ここではヨセフとマリア)、さらには聖母子(マリアと幼子イエス)を讃える詩歌である。ヨセフとイエスの裸足はきちんと重ね合わせられ、地上の汚れを浄められているかのようだ。



二十歳でミラノからローマに来たカラヴァッジョの若い感性を知る一枚だ。傲慢な性格で絶えず 暴力と背中合わせに生きた短い38年の実生活を考えると「エジプトへの逃避途上の休息」は想像し難い美しさだと思う。音楽を奏でる天使が地上と天国を結び、描かれた人物を通して心を浄められる気がする。1599年枢機卿デル・モンテの依頼でナヴォーナ広場側「サン・ルイジ・デイ・フランチェージ教会」のコンタレッリ礼拝堂に描いた「聖マタイの召命」はカラ

ヴァッジョの出世作で以後多くの宗教画を描くが、「エジプトへの逃避途上の休息」以後自然の風景が描かれることはなく、人物やエピソードのドラマ性だけが強く表に出るようになる。ミラノで培ったロンバルディア絵画の美しい風景は、権力と富、貧困、混沌とした活気に溢れるローマの街に来たカラヴァッジョの心から遠くなったのだろう。（古賀順子記）

参考 スクロヴェーニ礼拝堂にあるジョットの「エジプトへ逃避行途上」

